ACEF 2022年スタディツアー

PROTI MUHURTA

人生の一瞬一瞬を大切に

目 次

スタディツアー参加者紹介
p. 3

スケジュール
p. 4

バングラデシュについて
p. 5

ACEF・BDPについて
p. 6

BDPスタッフ紹介
p. 7~9

学校訪問
p. 10~12

BDP小学校卒業生インタビュー
p. 13

職業訓練校卒業生インタビュー/職業訓練校訪問
p. 14

マイクロファイナンス(MF)について
p. 15

MF受益者インタビュー
p. 16~18

Taize(テゼ)訪問
p. 19

女性クラブ訪問
p. 20

L'Arche(ラルシュ)訪問
p. 21

Boat Trip
p. 22

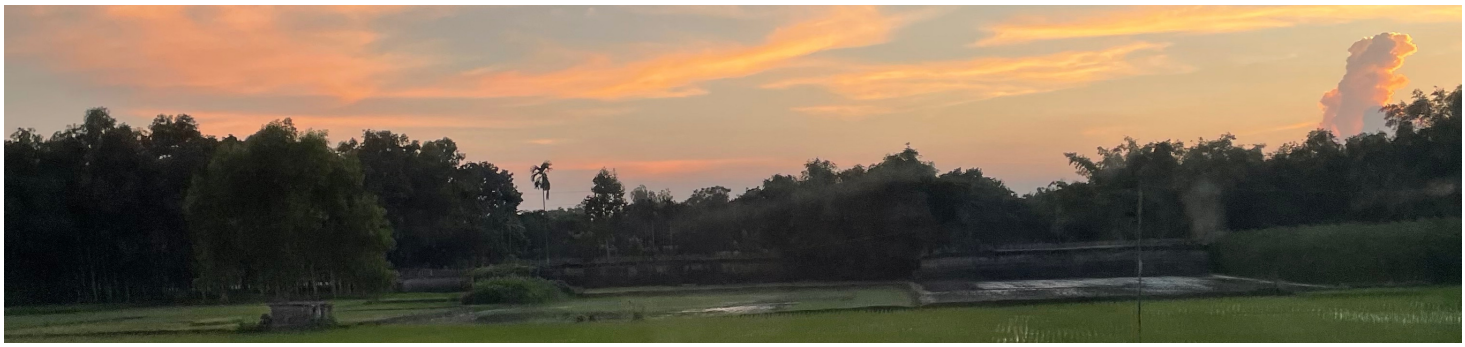
Cultural Show
p. 23

購入品・お土産紹介
p. 24

ベンガル語語録
p. 25

BDPスタッフの日本語語録
p. 26

参加者感想
p. 27~35



参加者紹介

小田さん

小田先生！とBDPスタッフに慕われ、親しみを持って呼ばれていたのは、一人ひとりに嘘偽りなくありのまま向き合う小田さんだからこそ。そんな小田さんの引き出しの多さには常に圧倒されて、ノートを取る手が止まりませんでした！

佐藤さん

視線の先には常に動物が。
ミーティングの構成を常に考えてくれていた。さすが先生！
全てに対して真正面から向き合っている佐藤さんのお話だからこそ、シェアリングではメンバー一同が毎回心を打たれた。

柳原さん

さつきさんにかかれば、どんな人も笑顔で楽しくおしゃべりしてしまう質問上手。
ニューディレクターの座にふさわしすぎるのに、本人は怯み倒していた。にもかかわらず、無茶振りスピーチは毎度完璧！人を勇気づける言葉をかける天才です。

渡部さん

私達が安全に楽しめるよう、常に見守ってくれていた。
渡部さんの細かな気配りがあったからこそ成り立ったスタディツアーでした！

凛花

現地の人々との関係性についてなど、視野の広さを感じさせるシェアリングをいつもしてくれた。
思考力と考えを的確に伝える表現力には脱帽。
できる人だけど、よくわからない流行り言葉を発明するなど、親しみやすいところがまた素敵。

萌子

心が綺麗で笑顔がとっても素敵。だからこそ周りにはいつも誰かがいて、現地の人と関係を築くのも上手。門番のタバジョさんと別れを惜しんで涙を流すまでの関係性になっていたのが印象的:)
好奇心も旺盛で目がキラキラしてた～！！

千遥

気づくと誰かに声をかけている、というほど積極性がすごい！パン・シュバリ・トゥン（食べると少しいい気分になる葉や実）も躊躇なく食べるほどチャレンジ精神旺盛。
最大の敵、睡魔にはなかなか勝てず、ふと見ると寝ていることもしばしば笑
エネルギーのオンオフが上手！

悠夏

考えの深さと言葉選びのセンスが素晴らしく、いつもみんなに「なるほど」を与えてくれた！落ち着いた雰囲気でありながら、にこっという笑顔がとても素敵で、そばにいてくれるだけでものすごい安心感が！
英語の面でもたくさん助けてくれました！

明日見

学ぶ意欲がピカイチ！「エタ・キー？（これ何？）」と聞き、メモを取る姿が何度も見かけられた。
また、誰に対しても常に気遣いの心を持つ人。そんな彼女の優しさを感じ取ったバングラの子どもたちにいつも最後まで名残惜しそうに見送られていた。

スケジュール

8/2

- ダッカ到着
- Pubail事務所到着

8/3

- BDPのオリエンテーション
- ナガリクレジットユニオン訪問
- ミエールバザールにてサロワカミューズ購入

8/4

- Samarsingh小学校訪問
- HaribaritekでMF受益者インタビュー

8/5

- 卒業生インタビュー
- テゼ訪問

8/6

- West Bashchara小学校訪問
- 職業訓練校卒業生インタビュー
- Boithamari Uttar ParaでMF受益者インタビュー
- ボートトリップ

8/7

- ガロコミュニティー訪問
- Digolkona & Boisnabpara小学校訪問
- ピクニックスポットにてMF受益者インタビュー

8/8

- ラルシュにて女性クラブとPCCを訪問

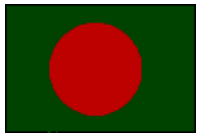
8/9

- アーロンでショッピング
- カルチャーショー

8/10

- 帰国

バングラデシュについて



バングラデシュ首都ダッカの空港に降り立つと、辺りはスパイシーな香りが漂っている。外に出ると、あまりの湿度の高さに眼鏡が曇った。人々や車の行き交う街は、活気にあふれている。リキシャやバスなどが、信号のない道路をひしめき合いながらも進んでいく。人々は物珍しそうにこちらを眺めている。さて、ここでスタディツアーにでかける前に、バングラデシュについて軽く紹介しておこう。

バングラデシュは、インド亜大陸の東端に位置しており、ガンジス川などに挟まれた世界最大のデルタ地帯が広がっている。雨期には河川の氾濫により、国土の3分の1が浸水することもある。気候は一年を通して温暖である。国土は147,000km2で、ちょうど北海道と東北地方を合わせたくらいの大きさである。そこに約１億6,800万人が暮らしている。このため、世界で8番目に人口が多く、人口密度が最も高い国の一つとなっている。

　バングラデシュは、比較的新しい国である。1947年のイギリスからの独立の際には、イスラム教徒が多数を占めたパキスタンの一部であった。バングラデシュが、ベンガル人を多数派とする地域として独立するのは、1971年のことである。なお、この歴史背景をもって、バングラデシュの88.4%がイスラム教徒であり、公用語はベンガル語である。

　バングラデシュは1990年代半ばまで「アジアの最貧国」と呼ばれてきた。しかし、ここ30年で目覚ましい経済成長を遂げ、コロナパンデミック前の時点で、一人当たりのGDPは約6倍にまでなっていた。

　バングラデシュの教育は、5年生までの初等教育が義務化されている。初等教育就学率は約100%を達成している*。これを下支えするのが、BDPのようなNGOなどによるノンフォーマル教育である。バングラデシュでは、ノンフォーマル教育は全体の15%を占めるのである。

　*就学率とは、あくまで入学に焦点を当てたものであり、修了率はこれを下回る。なお、バングラデシュの中等教育就学率は73%、高等教育就学率は24%である。

コラム：左手は不浄の手

バングラデシュで気を付けなければならないことの一つは、手の使い方である。右手は清浄の手、左手は不浄の手。左手はお手洗いで使い、それ以外のシーンでは右手を使う方が無難である場合が多い。バングラデシュでは、素手で食事をするが、その際には右手でなければならない。誰かに物を渡す際にも、また手を振る際にも、左手の使用を避けるのがマナーである。

ACEFについて

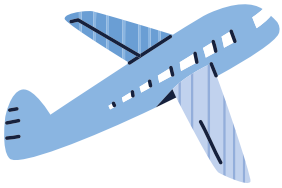
　認定NPO法人アジアキリスト教教育基金 (The Asia Christian Education Fund = ACEF エイセフ)は、バングラデシュのパートナー団体のBasic Development Partners (BDP) と共働して、1991年から30年以上にわたって初等教育支援を行ってきた。
　BDPとは、援助する側、される側という関係ではなく、Partner、Co-Worker (共働者) として共通の目標に向かうことを大切にしている。 また、「一人ひとりの尊厳が大切にされて、ともに生きる喜びを感じられる社会を目指します」というビジョンを掲げている。

BDPスクールについて

　BDP は、「すべての子どもに読み書きを」を理念に1990年に設立された、子どもと女性を支援する国際NGO団体である。現在は首都ダッカのスラム地区と農村の6地区で43校のノンフォーマル小学校 (BDP小学校)を運営し、約5,000人の生徒が学んでいる。近年では、マイクロファイナンスや職業訓練校も運営している。
　また、女性教員を積極的に採用することで、女性の地位向上に取り組んでおり、教育の質をあげるための教師研修も行っている 。加えて、43校のプレスクール（就学前教室）・ノンフォーマル小学校（1～5年）、3校の職業訓練校、4校で実施しているヒアプロジェクト（聴覚障がいを持つ子に補聴器などの訓練をさせ、通常の学校に入れるように支援するもの）、累計3000人以上への「クライメイト・アクション」（生徒やその親に気候変動を啓発したり、苗木をプレゼントしたりする）などを運営している。

☆BDPでは、学校に図書室を作ることで自分で学べる場を設けたいと考えており、ACEFでは、7～8月に図書室設立に向けたクラウドファンディングを行い、多くの方々からご支援を頂きました。

スタディーツアーについて



　ACEFでは、春休みと夏休みの年に2回、主に高校生以上の学生を対象にバングラデシュへのスタディツアーを行ってきた。 コロナ禍により中止されていたが、今回3年ぶりに、サービス・ラーニングなどで関わりのあった大学生を対象として再開され、全員、無事に帰国することができた。
協力してくださった皆様に感謝しております。

スタッフ紹介

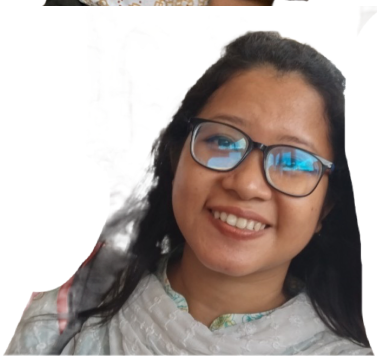
スタディツアーでは、BDPのスタッフや通訳の方々が、私たちの道中を常にサポートしてくれました。
そんなキャラの濃すぎるスタッフのみなさんを、感謝と愛をこめてご紹介！

BDPスタッフ

DHAKA OFFICE

アンブロスさん
推され度ＮＯ.１のほほえみ担当。静かだからこそ、最初は何を考えているかわかりにくいが、常に周りを見て私達が居心地が良いように動いてくれていたもてなしの人。ただ、もてなしの気持ちが溢れてご飯をよそってくれる量が多すぎる。「バングライキーボレ？（ベンガル語でこれはなんて言うでしょう？）」で抜き打ちテストを始め、メンバーに戦慄を走らせる。

ヘモントさん
癖強で仕事爆速。そして、すべての経歴がすごすぎる人。ヘモンドさんの「イキマショ」「ハヤクハヤク」があったからこそ、成り立ったタイトスケジュール！歌と家族の自慢が止まらない、愛すべき加トちゃん。



シルビアさん
圧倒的癒やし担当。こちらがわからないことに対して、優しい声で何度もわかるまで教えてくれる。
出会った初日から明るく話しかけ続けてくれた、優しいお姉さん的存在。
おっとりした声とは裏腹に、芯のある発言で周りに一目を置かれている。

カディジャさん
おしゃれ番長。カルチュラルショーでは、シャリーの着付けからメイク、そして写真のポージングまでこだわりを持ってノリノリで行ってくれた。
一度話せば内に秘めた優しさの虜に！
ミスターツイスト（スナック菓子）を持っている姿をよく見かける。

洋さん
生後六ヶ月とは思えない圧倒的落ち着きから、統べる者の風格を感じる。おそらく人生二週目。
涙は必死にこらえ、どうしても耐えきれないときには、自分の涙は自分で拭く漢。
次期ヘッドになるとの噂。

PUBAIL OFFICE

オモルさん
「トテモトテモカワイイ」というけど、可愛いのはオモルさん。
「スゴーイ」の一言で私達を常に元気づけてくれた。
奥様を筆頭に、ご家族全員圧倒的陽キャで、カルチュラルショーでは、ご家族の明るさで場が盛り上がった。

ラハジさん
笑顔が素敵な双子のお父さん。鮮やかな水色の服がトレードマーク。
「楽しめるのは今だけなのだから、人生の一瞬一瞬を大切に」という意味を持つ "proti muhurta" という言葉を教えてくれた人。「私達の優しいお父さんみたいですね」と言ったら、「当たり前でしょ」と自信ありげ。

プロカシュさん
ベンガル語を根気強くニカッとした笑顔で教え続けてくれた人。
紺とボーダーのTシャツのイメージが強すぎて、他の服を着ていても気づかれない。
バングラデシュ初上陸の私たちにベンガル料理の食べ方を教えてくれたのもいい思い出。

ニキルさん
ニコニコ笑顔の凄腕ドライバー。ナビ無しでバングラデシュの混雑した街をドライブし続けてくれた。
最終日の夜はまさかの経歴でメンバーを驚かせた。

スジョルさん
いつもは真顔な彼だが、ヤギが出てきた瞬間に笑顔で道を譲る優しいドライバー。
町中を走るときには色んな通行人に声をかけていて、顔が広そう。
ヘモントさんの専属ドライバー。

アリさん
序盤は結構硬い表情だったが、徐々に心をひらいて優しい笑顔を見せてくれた。特に、プレゼントを開封するときの笑顔は格別。
気づいたらしれっと写真を撮っている（主にヘモントさんのフェイスブック用）、BDPスタッフお墨付きのフォトグラファー。ご飯を食べる私達を見守ってくれた。

タバジョさん
Shooting spot (Pubailオフィスの周りにある映画のロケ地)が大好きな心優しきナイトガード。ベンガル語の分からない私たちに、ジェスチャーで心からの想いを伝えてくれた。想いが通じ合ったときの喜びは忘れられない。
お別れの2日前から別れを惜しんで涙を流していて、私たちももらい泣きさせられた。

シッラさん
ルティを焼くマスター。オネックゴロム（とても暑い）と言いながら、素敵な笑顔で私達に根気よくベンガル語を教えながら火の元でルティを焼き続けてくれた。
面倒見よく私達のことを気にかけてくれた。私達はシスターズだよ、あなた達が帰るのがとてもコシュト（悲しい）と名残惜しんでくれた。

ラシダさん
シッラさんと共に美味しいご飯を作ってくれる、凄腕ルティシコ(マスター)。早朝にルティ作りの体験をさせてもらったときは、不恰好なジャパニルティを横目に見ながら、美しいルティを作り続けていた。一見近寄り難い雰囲気をしているが、私たちとのコミュニケーションを楽しんでケタケタと笑ってくれる。キッチンから手を振ってくれるラシダさんに会いに行くのも、食事の楽しみの一つ。

JAMALPUR OFFICE

モクレスさん
ボートトリップで「ハッ！」という掛け声と共にキレキレの踊りを披露してくれた、BDPスタッフのダンス担当。慣れない環境で過ごす私たちをいつも気にかけてくれていた。
お別れのスピーチでは気遣いの心を見せてくれた。

シュプロさん
主に歌担当だったが、ボートトリップ後の「夜BDPで一緒に踊りませんか？」というセリフが印象的すぎて参加者にダンスのお兄さんと言われ続けた人。
サングラスにワックスでセットした髪できめていたイカしたお兄さん。

通訳のみなさん

福嶋さん
洋さんのお母様で、通訳を担当してくれていた。バングラのことなら何でも聞いてくださいね、と色々な情報を優しい笑顔で教えてくださった。
このお母様だからこそ、洋さんがすくすくと聡明に育たれている。

山内さん
ラルシュでも、テゼでも町中でも、山内さんを見かけたら多くの人が笑顔で「アヤコサン」と近づいてくる。別け隔てなく周りの人にエネルギーと安心感を与えてくれる人。バングラの人に伝わりやすいよう私達の質問を通訳をしてくれた。
癒やしのユーチューブを見ている山内さんに私達も癒やされた。

BDP SCHOOL

Samorsingh（8/4）（Gazipur）

生徒数：122名（2022.03時点）
対象学年：就学前教室〜5年

英語の授業をしているクラスを訪れた。子どもたちの隣に座って見学してていいですよ、と言われたが、急に外国人に近寄られたための驚きと緊張で、授業どころではない様子の子もいた。最初の訪問校だったため、小学生とのふれあいの仕方に戸惑っていたが、佐藤さんが用意してくださっていた折り紙の鶴や風船をプレゼントできたことで、少しは距離が縮められた気がした。

クラスで女の子が歌をうたってくれたが、「本当に愛している人からは報われない」というような内容だと通訳の福嶋さんから教えてもらい、メンバー一同びっくりした。

その後、校庭のようなところで、全校生徒が整列してくれたが、まだ緊張気味…。だが、集合写真を撮るときには、元気にメンバーの周りを囲んで寄ってきてくれた！

Bariyabani（8/4）（Gazipur）

生徒数：108名（2022.03時点）
対象学年：就学前教室〜5年

前回のスタツアでも訪れた学校に、急遽再訪することができた。（基本的に、より多くの学校をACEFメンバーに見せるために、BDPが2回連続で同じ学校に連れて行ってくれることはない）たった20分ほどの滞在でしたが、前回訪れたときのことを覚えているという子どもたちがいたと知れて、小田さんや佐藤さんはとても嬉しそうだった。写真で見たことのあった顔の子どもたちと、少し成長した姿で実際に会うことができ、スタツアメンバー一同、感動に包まれた。

また、校舎はやや古いように感じられたものの、コロナ禍で寄贈した手洗い用のタンク等も見ることができた。

West Bashchara Junior High(8/6)（Jamalpur）

生徒数：215名（2022.03時点）

対象学年：就学前教室～5年

6-10年生の生徒たちが通う、併設のハイスクールにも訪れることができた。小学生とは違い、いやいや歌をうたわされる男子高校生や、女子生徒が歌をうたってくれている間に机に突っ伏している男子中学生を見て、日本の学生と似ていると感じ、その共通ポイントに親近感がわいた。

図書室が設置してある小学校だった。しかし、なぜか見るからに高校生くらいの大きな子たちが本を読んでいて（というよりページを見つめていて、中には音読している子も）びっくり…。（演出だと判明^^;）

その後、無事に数冊の本の寄贈ができ、小学生は普段、読書を楽しんでいると分かり、安心した。

大縄や折り紙で仲を深められ、子どもたちの溌剌とした日常の様子を見ることができた。たくさのシャプラフーム（蓮）もつんできてくれた✤

Garo Community Junior High(8/7)（Bakshigonj）

明るくて広々とした校舎の、ガロ族（マンディー）の子どもたちが通う学校にも訪れた。今まで訪れた学校とは異なり、日本人への質問があるか尋ねると積極的に挙手してくれる子がいたりと、活発で社交的な子が多い印象を受けた。（山内さんによると、実際に、ガロ族では社交的な人が多いため、近年、裕福になっている人が多いそう。）

素敵な踊りを披露してくれて、笑顔がまぶしかった！☆彡

「大きな栗の木の下で」を一緒に踊り終わった後でも、覚えた振りで１人で踊ってくれる子がいたり、たくさんの子が、帰り際に日本語で「さよなら」や「また会いましょ」と叫んでくれたりして、嬉しかった。定期テストが終わって、本来は休暇の日に、私たちのためにわざわざ集まってくれていた生徒さん、先生方に、感謝いたします。

Boisnabpara (8/7)（Bakshigonj）

生徒数：75名（2022.03時点）
対象学年：就学前教室〜2年

就学前教育と小学校1，2年生を対象とした教育を行っている小規模の学校である。1999年に個人の家で始まったものが成長して今の形になったそうだ。昨年末から、校舎建て替えに向けた動きがあり、私たちが訪れた際にはまだ壁がなく、柱と屋根だけの状態だった。

生徒は2年生までだが、訪問時には、多くの3年生以上の子どもたちや大人も集まってくださっていた。印象的だったのは、集まった人々に向けた、BDPスタッフのメッセージだ。それは「地域の人々と共に学校を作りたい」「自分たちの学校と思ってほしい」というもの。地域の人々とともにこの学校が少しずつ成長することを願って止みまない。

右の写真は、少女たちがダンスを披露してくれた様子だ。

Lalkhuti (8/9)（Mirpur）

生徒数：182名（2022.03時点）
対象学年：1〜5年

スラムにある、お墓のとなりの小さな小学校である。この学校には、日本の小学生との文通を通した交流があり、JICAが支援に入ることもあるため、先生も生徒も日本に親近感をもってくれているようだった。子どもたちは、「よく知っているお友達のお友達」に出会う時のように、目を輝かせながら、私たちを迎えてくれた。

白い服を着た先生は、かつてBDPで学んでいらっしゃった。BDPの卒業生が、立派な先生として戻ってこられたことには、感慨深いものがあった。

Monipur (8/9)（Mirpur）

生徒数：241名（2022.03時点）
対象学年：1〜5年

住宅街の建物の2、3階にある学校だ。ここでは、日本の小学生からの手紙を手渡しした。生徒はとてもそれに喜んでくれて、この学校では先生も生徒もエネルギッシュだということが印象に残った。

なお、コンピューター科と縫製科の職業訓練校が併設されている。

BDP小学校卒業生インタビュー

BDP小学校を卒業し、現在ハイスクールに通う子どもたちとBDP小学校の先生にインタビューを行った。集まってくれた子どもたちは6年生が4人、7年生が1人。進学先はバラバラだったが、5人のうち4人が私立の学校に通っており、1人がマドラサ(通常の科目とコーランなどを学ぶ宗教学校)に通っているとのこと。同じBDP小学校の同級生も、殆どがハイスクールに進学したそうだ。初めは殆どの子どもたちが私立の学校に進学しているということに驚いたが、話を聞いてみると、通学できる距離に公立のハイスクールがなく、殆どの子たちが私立の学校に通っているとのことだった。ハイスクールに進学することは一般的になってきていると感じながらも、依然として、政府が運営する学校へのアクセスの問題があるのだということがわかった。

インタビューをしていて面白かったのは、ベンガル語、英語などの馴染み深い科目に加え、農業やICTの授業が行われているということ。そのような科目も含めて計14科目を学ぶそうだ。農業とICTの授業について、どちらも教科書ベースでの授業で、ICTの授業に関しては希望者が20台ほどあるコンピューターを使用できると教えてくれた。実習などはあまり行われていないとのことだった。

また、ひとクラスあたりの生徒数を質問したところ、90人や130人という回答があり、その人数の多さに驚いた。やはり、それらの背景には、学校が少なく、生徒が一校一校に集中してしまうという現実があると感じた。
小学校、ハイスクールどちらにおいても、公立の学校数が少なく通うことが難しい状況において、代替の選択肢となる学校を提供するということの重要性を改めて認識する機会にもなった。

職業訓練校生徒インタビュー

BDPの職業訓練校に通っている５人の生徒をインタビューした。
生徒たちは、①自動車機械科と②電機科のいずれかに通っていた。

今回インタビューに集まってくれた生徒たちのほとんどがBDPスクールの卒業生ではなかった。どこでBDPの職業訓練校を知ったのか聞くと、口コミという答えが返ってきた。同席していた職業訓練校の先生によると、BDP職業訓練校を広報するためにリーフレットの配布、マイクや旗を使った街中での宣伝、そして家々への訪問などを行ったそうだ。BDPスタッフのこうした地道な努力が実を結んだ結果として生徒たちが集まったことが分かった。

生徒たちに職業訓練校をなぜ志望した理由を聞いた際、自動車機械科に通っている生徒たちの返答が印象的だった。一人の生徒は「運転の技術を持っていると将来困ったときに活かせるから」と返答し、もう一人は「誰の助けも借りずに自分で職場や学校に移動できるから」と答えていた。経済的に自立し、自分の未来を自分で切り開きたいという生徒たちの思いが垣間見えたように感じられる。また、複数ある職業訓練校の中でもなぜBDPの職業訓練校を選んだのかを聞くと、無料であることに加えて、「運転と修理のセットで教えてくれるから」と返答した生徒が多かった。卒業後に活かせる実践的な知識をという思いで設立されたからこそ、こういった差別化ができたのだろう。

生徒たちに職業訓練校を通して彼らの人生は変わったか否かを問うと、一人の生徒が「１００％変わった」と返答した。その生徒は、現在小さな電気製品のサービスショップを運営している。そのお店自体は、職業訓練校に通う前から持っていたそうだ。しかし、職業訓練校で学んだことで、そのお店で対応できる商品の幅が広がったという。例えば、彼は今までは過去に扱ったことのある製品しか自信をもって修理することができなかった。しかし、電機科で学んだことで製品がどういった仕組みで動いているのかを理解することができるようになったため、初めて見る製品もプロフェッショナルとして自信をもって修理できるようになったと語っていた。

マイクロファイナンス（MF）

マイクロファイナンスとは？

＝少額の融資や預金の金融サービス

- マイクロファイナンスの融資を用いて起業や就労をすることで、貧困や生活困窮から脱却し自立するのを支援。
- 融資先：
  銀行　→　担保や返済能力を有する人
  MF　　→　貧困状態にある人々、特に女性を対象。
- グループローンが基本。
  - 前の人が返済することで次の人がお金を借りられるようになる。
  - このシステムは変わりつつある。個人貸付が主流になってきた。
- 融資だけでなく、預金も。
  - 確実に貯蓄を行うため。
  - わずかだが利子も得られる。

BDPによるマイクロファイナンス

- 目的：
  女性のエンパワメントにより家族全体の生活水準の向上や子どもの教育に好影響を与える
  （マイクロファイナンス事業による利益でBDP小学校の運営費を補うことも可。
  現在、資金源は寄付だが、より持続可能なかたちでBDPが運営できるようになる。）
- 支援対象：『事業を始めようと考えている』『BDP小学校の母親や先生』などの『**女性**』
- 形態：**グループ連帯保証を活用した個人貸付**。
  - 20人ほどのグループ（ショミティ）を作り、毎週集会で預金や返済金を集める。
- グループの議長や代表、秘書として先生やBDP area staffが入る。
- 最低の貸出額は１万タカ（およそ１万２千円）、場所により２万タカ。
- ビジネス例：農業、鶏卵、畜産、屋台、リキシャ引きなど。

HARIBARITEK BDP SCHOOL MF

この学校には「ロハ」と「コラ」というそれぞれ20人で構成され、先生がリーダーとして関わるショミティがあった。今回は19人のメンバーにインタビューを行い、その場にいる全ての人に対して名前、借りた額、用途を聞いた。

予想外だったのは、HaribaritekのグループではMFをローン貸付ではなく、預金の場所として活用しているメンバーが多いことだった。19人中、12人が預金のためにBDPによるMFに参加していた。これはローンを借りたいが借りられないという理由ではなく、今はローンが必要ないためとのことだった。インタビュー前はローンを借りることでビジネスを始めたい方が多いのだろうと勝手に想像していたため驚いた。ローン貸付サービスを利用した7人の方は皆、2万タカを借りていた。

用途としては牛を飼い始めた、オートリキシャを購入した、レストランを始めた、家の建築・修理に使ったなどがあった。

牛は、イード（イスラム教の犠牲祭で牛などの動物を捧げる）の前に高く売れるらしい。それまでの期間は牛乳などを売り、利益を得ているようだった。また、興味深かったビジネスは縫製工場の近くに家を建築し、縫製工場で働く女性を受け入れて料理を振る舞うというものであった。MFの用途として養鶏、農業などが多い中で、珍しいビジネスでとてもアイデアの練られたものだった。

一回以上借りた人は3人いた。1人目の方はフルーツ屋さんを営んでおり、フルーツの仕入れなどに2回目のMFを使用していた。2人目の方は1回目は家の修理のため2回目はオートリキシャの購入と異なる用途で使用されていた。3人目の方はレストランを経営している方で、ビジネス拡大のため再度利用したとのことだった。

インタビューを行う中で見つけた課題は3つあった。一つ目は、女性のエンパワーメントのために利用されているかは不透明であるということだ。MFが夫のビジネスや家族のためとして利用されているケースが多く、女性自身のためのビジネスがあまり見受けられなかった。二つ目は額に限度があるということだ。増額を求める声が多かったが、返済のリスクを考えるとなかなか難しいのが現実である。最後に実態が掴めないということだ。今回のインタビューでは皆の状況を理解できたわけではなかった。また、大勢の前でのインタビューだったため声をあげづらかった人もいたかもしれない。

BOITHAMARI UTTARANCHAL PARA MF

マイクロファイナンスの資金を使って牛を購入した方のお話を伺った。
彼女の家の敷地内に入ると、牛が二頭いた。母牛と、子牛だ。購入したのは母牛のみだったが、後にその母牛から子牛が生まれたという。彼女は以前も牛を飼った経験があるらしく、育て方は手慣れている。
子牛が成長しミルクを飲む必要がなくなれば、母牛の牛乳を売ってお金を稼ぐとおっしゃっていた。

BOISNABPARA BDP SCHOOL MF

もともとの貯金とマイクロファイナンスの資金２万円を使って文具店を開いた方のお話を伺った。
店のオーナーは彼女の夫である。彼はもともと遠方に出稼ぎにいっていたものの、このお店を開いてからは家族そろってこの店を切り盛りするようになったそうだ。お店では、子ども用の服や筆記用具を売っている。また、写真のフォトコピー・サービスも行っていると語っていた。
仕入れ値やマイクロファイナンスに返済するお金を差し引いた店の総利益は月２０００タカと好調だ。成功の秘訣は、彼らの戦略にある。学校が近くにあるのにもかかわらず、このお店ができるまでは近辺に文房具を売っているようなところがなかった。夫妻はそこに目をつけ、文具店を開いたという。
得た利益は仕入れや、副業で行っているガラス屋のために使用していると語っていた。

BOISNABPARA BDP SCHOOL MF

Boisnabpara BDP school に通う子どもの母親で、MFを利用している20人のメンバーにグループインタビューをさせていただいた。このグループではローンを利用している人が14人いて、その他の人は預金のためにMFを利用していた。
ローンの用途としては、そのエリアが農作地帯だったこともあり、農業に使っている人が多く、その他にはリキシャや牛を購入するため、布を販売するお店を開くために使用していた。ローンを借りた人々は皆、ローンのおかげで生活が良くなったと話していた。また、BDPのMFは他のMFと比較して、地域に根ざしており、BDPの先生やスタッフの関与があるため使用しやすい、安心して利用できるとの声があった。
ただ、他のインタビュー先であったように、やはり借りられるローンの額についてはもう少しあげてほしいという声が多かった。1,2万タカだと新しいビジネスを始めるには十分ではないようだった。

BOISNABPARA BDP SCHOOL MF
ルポシボシさん

BDPからのMFにより新たに屋台を開いたルポシボンさん（ニックネームはルポシー）にインタビューさせていただいた。ルポシーさんは夫、19歳、17歳、9歳の子どもの5人家族だったが、2013年に夫を亡くして以来、一人で子どもを育てている。ビジネスは「自分の生活のために行っている」とお話しされていた。

ルポシーさんは新たにお店を開く以前も家の前で同じく屋台を営んでいたそう。今はそちらのお店を娘さんが請け負っており、ルポシーさんは観光客や学校の生徒など人通りの多い場所でお店を開いている。仕入れは運んできてくれる業者がいるようで、屋台では小学生が主にお菓子などを買っていくそうだ。一日の儲けとしては500タカ～600タカで、一番儲かる時期は1月だとお話しされていた。
今までインタビューした中では一番表情が明るく、ご自身の仕事に自信を持っていそうであった。夫を亡くされて、子どもたちを養うだけでも大変だと思うが、MFが女性の生きる一助になっている事例を見ることができた。

TAIZE テゼ

TAIZEとは？

テゼはキリスト教の教派を超えた共同体で、戦後1949年にフランスに発足。
クリスチャンの中での和解が一つの大きなテーマであった。そのため、教会内の絵や十字架は様々な宗派のスタイルのものが使用されており、歌は誰でも歌えるように、シンプルで短い歌を繰り返すものが多い（何度も繰り返すので私たちも少し覚えた。ジョイナームジョイナームの歌がお気に入り♪）。また、解釈の違いが、宗派対立につながっているとの考えから、説教がない。マザーテレサもテゼの取り組みに共感したようだ。

「天地創造において、神は世界を良いものとしてお造りになったが、現在世の中を見てみると、争いや難民など問題が多い。テゼは本来の良い世界を取り戻す神の望む世界を作っていこう。」という目的のもと始まった。バングラデシュにおいても、昨今では国が「発展、発展」と言う中で、祈りの場所が必要なのではないかとテゼが発足した。私たちが訪問したテゼでは主にガロ族の子どもたちを多く受け入れていて、家族のいない子どもは宿舎で生活しているようだった。

テゼには誰でも受け入れる姿勢があり、異国の地日本から突然訪問したにもかかわらず、嫌な顔一つせず受け入れてくださったのが印象的だった。
私たちが訪問した日はTransfiguration（キリストの変容の祝日）前夜で、礼拝が終わると皆で蝋燭に火をつけ外に出た。右の写真がその時の様子である。
その後夕食を共にした。夕食は皆で円になり、カレーとお魚とご飯をいただいた。小さな猫が二匹ほどいてあちこちを散歩しては、隣に座ったりと自由な空間だった。

祈り、黙想し、食事をいただくという流れの中で、「**共に生きる**」という精神がまさに体現されているような場所だった。

女性クラブ

女性クラブで私たちを笑顔で出迎えてくださったのは、責任者のタフミナさんだ。彼女は何度も何度も心からの笑顔で「オネック　オネック　ドンノバッド（本当に本当にありがとう）」と私たちを歓迎しながら、彼女がこの団体にかける思いをお話してくださった。

バングラデシュでは、障がい者の女の子は家族でも社会でも一番最後に押しやられている存在だという。ベンガル語で障がい者はprotibondiというが、それは言葉通りに訳すと「毎日閉じ込められている人」となる。そんな環境で育った障がいを持つ人は「私にはまったく価値がない」と思っている者が多い。そのように思っている障がい者の女の子たちに「あなたたちは必要なんだ」と伝え、障がいを持たない女の子たちと同じように暮らせるようにすることが使命だという。

タフミナさんも、昔は自信がなかったという。しかし、今では何千人を前にしても物おじせず自分の仕事について誇りを持って説明できるとおっしゃっていた。実際、タフミナさんのみならず、女性クラブで私たちがお会いした人々は皆輝かしい笑顔で自信を持って仕事をしていた。特に印象的だったのは、私たちが訪問した日にちょうどオープンした彼女たちのショールームでの光景だ。そこでは女性クラブのメンバーが商品の紹介から値段の説明、そしてお会計までのすべてをエネルギッシュに行っており、彼女が如何に自分の仕事に自信と誇りを持っているかが感じられた。

L'ARCHE

ラルシュは、知的障がいを持つ人と持たない人が共に生きる国際的なコミュニティーである。バングラデシュでラルシュが設立されるきっかけとなったのは、ダッカの障がい者センターの崩壊にある。置き去りにされた子どもたちをテゼのブラザー・フランクが引き取る形で１９９６年にPCCの活動が始まった。

ラルシュで私たちがまず訪問したのは、知的障がいを持つ方が行っているアート系のワークショップだ。紙に絵を描いている方や、アクセサリーを作っている方などがいらっしゃった。中でも印象的だったのが、脳性まひを持っているため両腕はうまく動かせないものの、自由に動かせる足の指を使って器用にジュートの絨毯に糸で模様をつけていた方だ。非常に繊細かつダイナミックなバングラデシュの風景を糸で織り込んでいて、彼の作品はすぐに完売していた。彼以外も、皆素晴らしい作品を作っていた。私は、紙の絵を買い取ったのだが、その作品を作者から直接受け取るときに感謝の意を伝えると、作者の方が私の目を見て満面の笑みで作品を手渡してくださった。大切につくられた作品を私も大切に扱いたい、と強く思わされる優しい笑顔だった。

その後私たちは場所を少し移動し、PCCでご飯を食べることになった。皆さま温かく迎え入れてくださった。メンバーの中には、手をつながれて中に誘導されるものもいた。食事中は常に温かい空気が流れていた。特に思い出深かったのが、洗面台での一場面だ。初対面の私たちに対しても臆することなく「石鹸を出して」、「水を出して」といったジェスチャーを行ってきた女性がいた。非常にフレンドリーな方だという印象をもったからこそ、解散後に、山内さんからあの場にいた知的障がいを持つ方の中にはあらゆるつらい暴力を受けた方がいることを聞いたとき、とても驚いた。毎日安全・安心に暮らせるPCCで生活しているからこそ、過去のトラウマに完全に支配されることなく過ごせているのだろうと感じた。

BOAT TRIP

Jamalpurから車で20分ほどの船着き場から
ボートに乗っていざ出発！！
でも実は旅はオフィスを出る前から始まっていた…!
スタッフの方々、楽器を持ち出して待ちきれずに演奏していました笑

2曲ずつくらいで「ジャパニの歌どうぞ」
と無茶振りされ、その度に
何歌おうってなってました。
ベンガリソングは相変わらず完璧です。

こちら話題作
太陽を手に乗せるヘモントさん
の撮影裏です:)
笑ってもらってもいいですかね？

遠近法で太陽を手に乗せたかったのに、
なぜか草を持つ羽目に…
「私太陽持ちたかった」
という名台詞が萌子ちゃんの口から
飛び出します

帰りの船でボルテージは
マックスに。モックレスさん、
踊り出します。

船を降りるとき、
ダンスのお兄さんが
「今夜ご飯の後踊ろう」と
誘ってくれました。
でもこの日結局実現せず…泣

CULTURAL SHOW

BDP スタッフのおしゃれ番長、カディジャさんが40着ほど持っているという。
サリー（ベンガル語でシャリー）の中から何着か持ってきて、
私たちに着付けてくれました！！
みんなシャリーを着るのは初めてです…!
上下に薄い生地でできた下地をまとったら、後はもうシャリーの布一枚だけ！長方形の細長〜い布を折り畳んだり、巻いたりして、
あの豪華なシャリーができているんです！みなさんご存知でしたか？
スタツア参加者メンバーは大興奮。中にはメイクまでしてもらった人も。

Pubail オフィスの近くに住む子どもたちが
私たちにヘナタトゥーをしてくれました！
下書きなしでこのクオリティ！
プロフェッショナルとはこのこと。

パプリカを踊った後
盆踊りを踊りました
途中から輪に入ってくれる
子どもやスタッフもいて
大好評！よかった〜

まず最初にバングラの子どもたちが
5曲、ダンスを披露してくれました！
日本メンバー全員圧倒されて
内心「次どうしよう」って
思っていたと思います笑笑

締めはやっぱり
BDP スタッフの熱唱。
実はオモルさんの奥さんが
一番の歌姫…？！

SHOPPING お土産

たっくさんのスパイスとお菓子。
買いたくなっちゃうよね、わかる。

バッグは
身につけるとこんな感じ。
刺繍が映える〜！

素敵な手工芸品がずらり。
戦利品@L'Arche

これは実はバンコク土産。
トランジット6時間もあると
誘惑に負けます。

飛行機乗る直前まで
ベンガリフードを堪能。
あまーいミスティ

ベンガル語録集

〈挨拶と会話基礎編〉

【アッサラーム　アライクム】（イスラム教徒の方に対し）おはよう、こんにちは、こんばんは、さようなら
返事は「ワライクム　アッサラーム」
【ノモシュカル】（キリスト教徒の方に対し）おはよう、こんにちは、こんばんは、さようなら

宗教に関わらず使えるよ！と学んだ挨拶は以下
【シュボ　ショカール】おはよう
【ハロー】こんにちは
【シュボ　ションダイ】こんばんは（夕方）
【シュボ　ラトレ】おやすみ

以下は「これさえあれば会話できる！」、というのは過言だが、欠かせない表現であることには間違いない
【バロア　チェン？（ケモナ チェン）】元気ですか？　【バロ　アチ】元気です
【アプナール　ナーム　キー？】あなたのお名前は？　【アマール　ナーム　○○】私の名前は○○
【アバール　デカ　ホベ】また会いましょう

〈学習編〉

バングラデシュについてもっと知りたい！という姿勢で会話を広げていくにはこれ
【エタ　キー】これは何ですか？
【○○　バングライ　キー　ボレ？】○○はバングラ語でなんといいますか？
【○○マネ　キー？】○○ってどういう意味ですか？

〈食事編〉

この二つの表現を知っていれば、食事を楽しめる
【○○ディン】○○下さい
【（オネック／クップ）モジャ】（とても）美味しい

美味しいものたち
【パニ】水　【ドゥ　チャ】ミルクティー
【コラ】バナナ（「ラ」はLの音。この発音については、アンブロス先生による食事のたびのテストがある）
【ディム】卵　【ゴル／ムルギ　マンショ】牛／鶏肉
【ルティ】ルティ　【トルカリ】カレー　【バジ】炒め物　【ダル】豆スープ

BDPスタッフの日本語語録集

　BDPスタッフが、ベンガル語や英語で会話しているときでも、ごく自然に日本語の言葉が入っていました。日本人はあまり使わない表現もありましたが、日本語が出てくるとなんだか嬉しく、和やかな雰囲気が生まれました。そんな "ベンガルジャパニーズ" をいくつかご紹介します！♡

【問題ない】…実際は問題がありそうなことでも、基本的にこの一言で全て解決します。利用率、圧倒的No.1の日本語でした。日が経つにつれて、スタツアメンバーの口癖にもなっていきました。

【チョット問題】…予定時間より遅れていたときや、出していただいたお水が日本人にとって安全かどうか分からないときなどに、よく使われました。険悪なムードを作らず、むしろみんなを笑顔にさせてしまうという効果を持つパワーワードでした。「チョット」どころではない問題があるものの、ピリピリとした雰囲気にはさせたくない、といった状況でも使える便利な言葉です。

【早く行きましょ/ 行きましょ行きましょ】…時間が押しそうなときに多用されます。命令形ではないので、このように急かされても実は心は穏やかでいられます。

【おいしい？→ほんとに？】…ごはんのときに、ほぼ必ず聞かれた言葉でした。毎回のごはんが本当に美味しかったのですが、「ほんとに？」と追い打ちをかけられることで、「美味しい」と思う気持ちをきちんと伝えることが大切だと感じました。

【そっかそっか】…相槌を言葉にすることで、相手への誠意が生まれる気がしました。「そっか」を繰り返すところがポイントです。(^^♪

【トテモトテモカワイイ】…ストレートな言葉には嘘がなく、素直に喜んでもらえるという効果があります。「トテモ」を繰り返すところがポイントです。(^^♪♪

【おちゃ】…ごはんの後には、ベンガル語で「チャ」と呼ばれる（基本的に）とても甘いティーを出していただきました。「チャ」でも伝わるのに、より日本語らしい「おちゃ」と言ってくれていたことが嬉しかったです。

【また会いましょう】…日本人同士では、このような直接的な表現はあまり使いませんが、この言葉にはより心がこもっているように感じられました。丁寧で、日本人として逆に見習うべき素敵な表現だと思わされました。

　BDPスタッフが日本語を使っている言葉が、日本人の私たちにもうつってくるという、不思議な現象が起きましたが、日本語を共有できて、お互い幸せな気分になりました！♡
また、私たちもベンガル語をもっと覚えたい！という意欲を、よりかきたてられました！

参加者感想文

「アジアの隣人と共に生きること」の土台は何か？

小田哲郎（ACEF事務局長）

私がACEFの事務局長となった2019年の夏に、４年ぶりのスタディツアーが実施されました。治安の悪化により３年間スタディツアーが開催できなかったからです。それから再び新型コロナウィルス感染によりバングラデシュ訪問がストップしてしまいました。今回のスタディツアーの実施には議論がありましたが、ここで実施しなければ再開することが困難になると判断し、すでにACEFの活動に参加している大学生限定で募集し、無事に実施することができました。そのことを感謝しています。

今回は、これまでのBDP学校訪問に加え様々なプログラムを「お試し」で加えてみました。その中でも私が個人的に心に残った、一番加えて良かったと思うのは、テゼ共同体の訪問とテゼからうまれたマイメイシンでの働きの障がいを持つ女性のグループ「アルヒー」と知的障がいを持つ人のコミュニティ「ラルシュ」の訪問、そこで実際に働いておられる山内章子さんが通訳としてツアーに加わってくださったことです。それぞれの訪問先のことはこの報告書の別のページで述べられているでしょうし、参加者の感想の中にも山内さんとの車中や宿舎での会話から受け取ったメッセージも触れられているでしょう。私は毎晩のシェアリングを通して、学生参加者たちの中にあった「隣人とは誰か？」「共に生きる、共に働くとはどういうことか？」という疑問に、だんだんとその答えをつかんでいく様子を見ました。

ACEFのスタディツアーで大切にしているのは、朝晩の礼拝とシェアリングです。今回の学生参加者はキリスト教主義の大学からの参加ですが、実際の教会に通った経験のある人はいませんでした。しかし、聖書を読んでそこから、自分の経験をシェアする一人一人の話は自分のこれまでのあり方を振り返り、またバングラデシュでの出会いを通してどう考えるようになったかを実直に語るものでした。印象深いのは、イスラム教徒、ヒンズー教徒、キリスト教徒の宗教や民族の違いを超えて、愛に基づいて働いているテゼ共同体のブラザー・ギョームの言葉や行いに心動かされ、また同様に「アルヒー」での山内さんの働きの中に、ラルシュ共同体の中心に愛を見いだしていることでした。

バングラデシュの国の経済は発展し社会も変わってきています。そんな中でACEF設立当初からの「共働」の意味を問い直しつつBDP学校を巡って子どもたちと会い、マイクロファイナンスの受益者の声を聞いてまわりました。テゼで小さなこどもも訪問者も一緒に輪になってすわって夕食をいただきながらブラザー・ギョームと話していると、「今のバングラデシュは発展、発展とお金を借りて投資することに社会全体が夢中になっている。だから、何かをするのはなく立ち止まって静かに祈る場所が必要です。」とマイメイシンからジャマルプールの静かな村に移った理由を語ってくれました。深く共感しました。

礼拝の中で何度も唱えた本田哲郎神父バージョンの「主の祈り」に「私たちが、あわれみや施しを受けたり与えたりすることでよしとすることなく．．．正義の実現を大切にし．．．神と人を大切にする平和と喜びに満ちた社会が作ることができますように。」とあります。私たちの移ろいやすい感情や、目の前の成果を求める行動ではなく、人と人との関係性の修復のことだと思います。貧しい人々と見下してしまっていた、障がいをもっている非力でかわいそうな人々と決めつけていた私たちの偏見を取り去り、真に人と人との対等な関係を築くことが「共に生きる」ことに必要で、その揺らぐことのない土台にあるのが愛であることを今回の旅から学ばせていただきました。

「またね」の約束を守るために

明治学院中学校・明治学院東村山高校　社会科教諭　佐藤飛文

2012年の夏、東日本大震災の津波被災地域で子ども会を開いた。その日の夜のシェアリングで、ボランティアに参加した高校生が次のような報告をした。「子ども会に参加してくれた子どもに『またね』と声をかけたら、『お姉ちゃんの「またね」は信じてもいいんだよね？』と尋ねられて言葉につまってしまった。」とのことだった。そこで、その子が何故そのような問いかけをしたのかを皆で話し合った。被災地の子どもたちは震災を通して多くの喪失体験をした。学校や避難所や仮設住宅でも出会いと別れがあり、そして多くのボランティアとの出会いと別れも経験したことだろう。「またね」と口約束しても、その再会の約束を裏切るボランティアもいたのではないだろうか。そんな子どもたちをさらに傷つけないためにも、被災地で出会った子どもたちとの関係を持ち続けよう、と話し合った。このシェアリングを通して、「子どもたちとの『またね』の約束を守ろう」という活動目標が立てられ、その言葉が現在も私たちのボランティア・チームのスローガンとなっている。

このことがあってから、私は「またね」という言葉を軽い気持ちで使うことが出来なくなってしまい、再会への強い意志がある時だけ「またね」と言うようになった。３年前に初めてACEFのスタディツアーに参加したのだが、その時に私はバングラデシュの子どもたちに「またね」と言うことが出来なかった。次にスタディツアーに参加したとしても、訪ねる学校が違うことが多いからだ。日本人が来るのを楽しみに待っていてくれているBDPスクールはたくさんあって、それらの学校を順番に回っていくと、なかなか同じ学校を訪問することは出来ないと聞いていた。だからBDPのスタッフの皆さんとは「またね！（See you again!）」と再会の約束をしたのだが、BDPスクールの子どもたちには「またね」と再会の約束をすることが出来なかったのだ。この子と会うのは今日が最初で最後かもしれない、そんな思いで子どもたちと交流し、折り紙で作った風船を渡していた。

しかし今回、３年ぶりにスタディツアーに参加して、プーバイルのバニアバリBDPスクールとダッカのラルクティBDPスクールを再訪することができた。３年前は低学年だった子どもたちが高学年になっていて、３年前に私たちが訪問して交流したことを覚えていてくれた。特にラルクティBDPスクールの子どもたちは、今も折り紙が大好きで、覚えた日本の歌もたくさん歌ってくれた。子どもたちと再会することができて、本当に嬉しかった。だから子どもたちと別れるとき、私は自然と「またね」という言葉を口にしていた。

現地で私たちを案内して下さった山内章子さんは、行く先々で友との再会を喜んでいた。特にボクシガンジの教会で再会した男性とは、何年も前にマイメイシンのテゼで出会ったのだという。その時には高校生だった彼が父親になっていて、今はマイメイシンから遠く離れたボクシガンジで暮らしている。彼との再会と彼の家族との新たな出会いを喜んでいる章子さんの姿を見て、「また会いたいと願っていれば、神さまはきっと再会の場を与えてくださるのだ」と思った。

今回はBDPスクールの他にも私立の中学校やミッションスクールを訪問することが出来た。いつか私の勤務校がバングラデシュの私立中高と姉妹校提携ができるといいな、といった新しい夢も与えられた。子どもたちとの「またね」の約束を守るために、そして新しい夢をかなえるためにも、またバングラデシュに行こうと思う。

「ACEFスタディツアー」とは

ACEF事務局職員　柳原さつき

以前から、私の周りには「バングラファン」が何人もいる。青年海外協力隊で中米・ニカラグアに赴任して以来「中米LOVE」だった私には、正直なところその気持ちがよくわからなかった。とはいうものの、振り返ると20年前に「貧困対策」という研修で初めてバングラデシュを訪れ、その後も「日本の美味しいサツマイモをバングラデシュで栽培する！」という日本企業のお手伝いで、何度かバングラデシュを訪れることになり、何かとご縁のある国だった。

そして、今年7月からお仲間に加えていただいたACEFには、「バングラファン」がたくさんいて、そのきっかけの多くがACEFのスタディツアーだと伺った。あまたあるスタディツアーの中、これほど多くの人をバングラデシュに惹きつけるスタディツアーとはどんなツアーなのか？どんな特色があるのか？クリスチャンではない自分にも響くのか？などなど、興味が湧いてきた。
そんな思いを抱きながら参加した今回のツアーは、驚いたり、感動したりしている間にあっという間に終了。今振り返り、初ツアーを経験した私なりの特記ポイントは次の4つである。

① 朝祷と晩祷
クリスチャンであるなしに関わらず、参加者がもれなく担当するということで、少々戸惑いはあったものの、ほんの一部でも聖書を読み、それをきっかけに自分の心にあることをツアーの仲間たちに共有するのは、自省や相互理解のきっかけ、そしてチームビルディングのためにも有効な良い方法だと思った。

② シェアリング
上記晩祷に引き続き、参加者全員によるその日のシェアリングも、お互いの話を聞くことで気づくことが多く、よい時間だった。途中からリーダーの提案により、2つのグループに分けて少人数のシェアリングとしたのもよかった・・・が、余計話しやすくなってしまい、時間を延長しても終わらなくなってしまった。

③ BDPの存在
30年かけて築き上げたBDPとの信頼関係は、難しいところも多々あるのだろうが、訪問したACEFのツアーメンバーにとっては、心地よい空間を提供してくれる。「我々はファミリーだ」とAmbroseさんもおっしゃっていたが、よくある国際交流事業では早々作り出せない関係の空気を感じることができた。また、日本の団体の現地事務所が事業を実施するのではなく、その国の団体が事業を実施するという意味は大きい。距離感を大切にしながら、いかに「ともに生きる」か、考えどころである。

④ バングラデシュ人の誇り
これはまだまだ勉強しなければならないところだが、独立の経緯などを聞くと、バングラデシュという国や文化に対する人々の思いは、私たち日本人の想像をはるかに超えるものがあるのだろうと想像する。かつて、中米LOVEのきっかけになったニカラグアで「サンディニスタ革命」に感動した自分は、バングラデシュを今後さらに学びながら、もっと好きになっていくのだろうなと予感している。

今後さらにスタディツアーを開催していく中で、また日常業務に従事する中で、またいろいろな局面に遭い、自分の気持ちや考えも変化していくのかもしれないが、今回のスタディツアーでは上記のような整理をしている。20年前からのこのご縁を大切に、まずは次回のスタディツアーに備えたいと思う。

スタディツアーに参加して

ACEF事務局職員　渡部 陽子

ZOOMや資料からだけではなく、五感でバングラデシュを感じ、実際にBDPスタッフや小学校の先生・子どもたちに会ってみたい、ACEFスタディツアーがきっかけで、世界の様々な場所や分野で活躍されているという方々の話をお聞きしてきたので、その魅力を自分だけではなく今回参加する学生さんたちの変化を通して確かめてみたい、そして、最近のキーワードとなっていた「共に生きる」ということを改めて考えてみたいという思いで、今回のスタディツアーに参加しました。

競り合いながら進んでいく車のクラクションの音、鳥のさえずり、縫製工場から出てくる女性たちの色鮮やかな衣装、薄暗い道に飛び交うホタルの光、美味しいカレーと甘いミルクティー、色々なスパイスの匂い、小学校の子どもたちやBDPスタッフが披露して下さった歌や踊り、手の甲に描いて頂いたメンディ（ヘナの模様）、ボートトリップで見た川辺の美しい夕日、その他記述しきれないほどのバングラデシュを体感することができました。そして、小学校訪問、職業訓練校やBDP小学校の生徒さん、BDPマイクロファイナンスを利用している女性の方々へのインタビュー、テゼ共同体・ラルシュ共同体・女性クラブなどへの訪問と、想像以上に多くの貴重な経験と、BDPスタッフや小学校の先生、生徒の皆さんをはじめ、スタディツアーを支えて下さった多くの人たちとの出会いもありました。

私が最も印象に残っているのは、障がいを持つ女性たちの集まり、女性クラブ責任者のタフミナ・アクタールさんです。「コロナ後、初めての外国のお客様です」と満面の笑顔で、活動内容を説明される姿は、眩しいくらいに輝いていて、とても優しい表情の中にしなやかで強い力を感じました。昔は、人前で話すこともできなかったタフミナさんが、様々な国からの訪問者を受け入れ、他の国の人たちができることは、私たちもできるという気持ちで頑張り、今では何千人という人の前でも、自分の仕事をしっかりやっていると話すことができると話してくださいました。あなたは大切ではなく、あなたは必要と伝えることで、私には生きている価値がないと思っている人たちに、価値があると分かってもらい、それぞれの人に合った仕事を与えているとのことでした。信念をもって誠実に取り組んでいる人には、サポートをしてくれる必要な人たちが自然に繋がっていくのだなと思いました。

短い期間で、できるだけ多くの場所に訪問した方が良いのか、テーマや場所を絞って少し掘り下げた体験をする方が良いのか、とても悩ましい所ですが、今回実施した日本の小学生とBDP小学生の手紙の交換は、短い訪問でも、その場限りで終わりではなく、今後も繋がっていくことができ、バングラデシュの子どもたちからの手紙を受け取った日本の子どもたちの反応もとても楽しみです。

朝早く起きてルティの作り方を教えて頂きながら宿泊先のスタッフと交流を深めたり、いつもノートに新しく覚えたベンガル語を書き留めたり、最初は少し距離のあった仲間たちとの関係性もギュッと近い親しい関係性に変わっていったり、日本とは違う文化や慣れない少し不便な生活も楽しみながら順応していたりする学生の皆さんの明るく楽しく過ごしている姿は、とても素晴らしく、日々パワーを頂きました。帰国後は、皆さんそれぞれの道を歩まれることと思いますが、過去のスタディツアーに参加された方々と同じく、今回の経験を少しでも何かの形で活かしていただけることを願っています。

中村哲さんが「日本人は、ますます性急で気が短くなっている。これも他者の理解を阻んでいる理由の一つではないかと感じています。そうやってインスタントになればなるほど、現地理解が浅くなりやすい。分かったつもりの分だけ、分からないよりも害が大きい。「信頼」は一朝にして築かれるものではない。利害を超え、忍耐を重ね、裏切られても裏切り返さない誠実さこそが、人々の心に触れる。」と話されていました。スタディツアーは滞在期間が短く、私たちが見たバングラデシュは、ほんの一部分でしかありません。今回のツアーをきっかけとして継続して関心を持ち続けることが、「共に生きる」ことの、はじまりの一歩になると思っています。

「共に生きる」とは

青山学院大学2年　石井萌子

今回のスタディーツアーに参加するにあたって、あらかじめその目標を決めたり、目的を考えたりすることを、あえてあまりしないようにしていた。その理由は、私にとってまだまだ未知の国「バングラデシュ」での活動内容を、想像することが難しかったからである。その上、目的などを決めると、それに縛られてしまいがちになり、吸収すべきことをこぼしてしまうのではないか、とも思っていた。そのため、先入観などを極力減らして、様々な体験ができたと思うが、ツアーを終えてみると、バングラで出会った人々の多くの言葉が心に残っていることに気づいた。そして、サービス・ラーニングのときからぼんやりと抱いていた、「共に生きる」とは、という疑問の答えが自然と浮かび上がってきたように感じられた。

まず、現地で長年、理学療法士をされている章子さんが教えてくれた、テゼのブラザー・ギョームの言葉を紹介したい。山内さんが物乞いの人への接し方を尋ねた際に、「お金はあげてもあげなくてもよいのですが、それよりも『相手を人間として見ていますか？』」と答えられたそうである。実際は貧しいわけではなくても、物乞いを大きな収入源として豊かな生活を送っている人も、中にはいるようなのだ。日本では「物乞い」自体ほとんど見たことがなかった私にとっては、「物乞い＝貧しい」という考えを持ってしまっており、この話は衝撃的だった。そのため、物乞いに限らずどんな人も、見た目や印象だけで判断せず、人間として時間をかけて理解していくことが大切なのだと気づかされた。

また、MFで新たにお店を始めた女性は、休日である金曜日にも営業しているか、という質問に対して、「している。というか、そういう日が1番儲かるのよ。そんなことも分からないの!?」と仰られた。強い言葉にドキリとさせられ、日本人がこのようなことを伝えるとしたら、こそっと話すのではないかとも思った。しかし、仕事は日々生きていくためにするものでもあると改めて感じ、何事にも意思を持って取り組むべきだと思わされた。また、いつのまにか、まだ途上国である国の方から、このような説教じみた言葉を投げかけられることはないだろうと考えてしまっていたと気づかされ、国などの「全体」よりも「個」を尊重して考えることが重要であると実感させられた。

さらに、BDPスタッフ モクレスさんの、私たちがJamalpur Officeを去るときの「さよならスピーチ」での言葉も印象に残っている。「日本とは全然違う食べ物や寝るところで、申し訳なかった。ダンスや歌をたくさんしていたが、気分を害した人がいたら申し訳ない。」ノリノリでダンスを披露してくれるなど、いつも明るい方というイメージがあったので、これを聞いたときに悲しくなってしまった。一学生にまで、気を配ってもてなし、楽しませてくださっていたのに、お詫びの言葉で締めくくられては、感謝をどう伝えたらよいのか分からなくなってしまった。けれども、たとえ自分が楽しんでいるときでも、他の人がどう思っているか考えを巡らす姿勢は、見習うべきだと思った。

そして、ナイトガードのタバジョさんを紹介したい。ベンガル語しか話せず、初めの数日はジェスチャーもあまり理解できず、もどかしく思っていた。それでも、固有名詞や私たちが覚えたわずかなベンガル語をくみ取っていくと、言いたいことはなんとなく分かるようになり（分かったつもりになっただけかもしれないが、それでも嬉しかった）、互いに心が温まっていくのを感じられた。Pubail Officeを発つ3日前から、お互いに涙が溢れてしまっていたのは、心が通じ合えていた証拠だと思う。そのため、相互に理解しよう、理解してもらおうと努めていれば、言葉が通じなくとも、関係を築いたり共感したりすることはできるのだと思えて、きっとスタツアに参加していなければ信じられないような経験に感激した。

このように、スタツア全体を通して、「相手から何かを学びたくなる」ことや、「親切さを親切さで返したくなる」ことの連続だったのだ。ゆえに、現実として存在している貧富の差を目の当たりにすることもあったが、それに関わらず、誠実に親切に接し、接されることのくり返しが、「共に生きる」社会をつくることにつながるのではないかと考えられた。現状、日本はバングラよりも豊かで進んだ国と言えるが、バングラで急激にインフラやビジネスが成長していることを実感し、いつか立場が逆転するだろうと思えた。そうなったとしても、「共に生きる」という言葉を肯定的に捉えられるように、バングラの人々の優しさを忘れないようにしていたい。

理解のために相手の文化に染まってみる

国際基督教大学3年　山田明日見

バングラデシュでのスタディーツアーは、未知のものたちとの出会いの連続だった。空港に降り立った瞬間から、スパイシーな空気に包まれ、人々の活気に圧倒された。車が押し合いへし合いしながら進むような大渋滞のダッカ市街や、立場の優位な人が誘導的に進めていく会話の在り方など、新鮮に感じられたものは枚挙にいとまがない。

新しいものを受け入れるのには、時間がかかることもあった。お湯ではなく水のシャワーをまともに浴びれるようになるには、数回の入浴経験が必要だった。飲み水一つをとっても、始めはその鉄臭い味に軽い拒否反応を覚えたりしていた。

中でももっとも消化に時間を要したことは、自らがゲストとしてもてなされている状況だった。BDPスタッフの皆様は、普段の仕事をこなしつつも、私たちをもてなすために食事を共にし、すべての活動に同行してくださった。学校やその他の施設では、いつも綺麗な花束で歓迎していただいた。私たちのスタディーツアーに関わってくださった人々は、BDP学校の子どもたちやその保護者、さらに近所の人々などを数えれば、数百どころか数千にも及ぶかもしれない。

しかし、この有難いはずの状況に、私は大きな戸惑いを覚えていた。学生の分際で、これほどたいそうな接待を受ける権利がどこにあるのかが分からずにいたのである。例えば、マイクロファイナンスの受益者には、かなりパーソナルな質問を投げかけることを許されていたが、このように学びの機会を与えていただいてよいのか迷いが生じていた。「相手の家に土足で踏み込んでいくような行為なのではないか」と不安になってしまっていた。

もともと「共に生きる」ことを最近の自らのテーマにしていたために、さらに複雑な気持ちになった。私がスタディーツアーに参加した理由の一つは、社会的に弱められている人々と共に生きたいとの想いを持っていたためだった。しかし、バングラデシュにやってくると、外国人やACEFの一員として特別扱いを受け、立場の違いをより強く意識することになったのである。

しかし、私のもやもやは、通訳としてツアーに同行してくださったあやこさんの二つのお話をきっかけに少しずつ晴れていった。一つ目は、ホスピタリティーは、バングラデシュの人々がとても大切にしているものなのだというお話である。バングラデシュの人々は、客を迎え入れる際に、その場が歓迎モードになることに力を注ぐのだという。このお話しからは、私はバングラデシュでの経験を自らの価値観で理解しようとし、違和感を覚えてしまっていたことに気づかされた。日本の基準で考えるからこそ、歓迎モードが普通ではないと感じられたのである。

二つ目のお話では、他者、特に弱められている人々と、一人の人間として向き合うことの大切さを学んだ。あなたが、相手のために何かをしたいかどうかは、相手と人間として向き合ってどうしたいと思うかで決めなければならない、とあやこさんはおっしゃった。そこから、私は相手と向き合うという姿勢を欠いていたと気づかされた。どこかで自らを特権階級と認識し、だからこそ社会的な問題に携わったり、国際協力をする責任があると認識している側面に気づいた。自らの活動の根拠が、立場に伴う責任であったからこそ、バングラデシュの人々の行動も彼らの立場から説明しようとしていた。自らが受けたホスピタリティーも、自らの特権的立場に起因するものなのではないかと思ってしまっていた。その結果、学生の分際でこれほどのホスピタリティーに接する権利はないという考えが生まれていた。これは、歓迎してくださった人々に対して、無礼なことである。

自らの価値観や立場に固執した結果、私は歓迎されていることを素直に受け止められていなかった。しかし、あやこさんのお話をきっかけに、「BDPの関係者や現地の人々が、私を一人の人として歓迎してくださっている」という事実を受け止めることができるようになった。そこからは感謝が生まれた。スタディーツアーを終える頃に感じていたのは、この頂いた恩を少しずつ様々な形と場所で返していきたいということだった。

さて、帰国すると、おかしなことに日本の在り方が気持ち悪く感じられた。空港の人々があまりにそっけなく感じられた。シャワーが温かいのが違和感で、水は不味い。リュックサックを開くと、バングラデシュのあのスパイシーな匂いがした。バングラデシュの在り方に染まっている。少し、バングラデシュやバングラデシュの人々に近づけたようで、嬉しい気持ちになった。

自分の価値や立場を脇に置いて、相手と向き合うこと。相手の価値観を理解し、その文脈のなかで相手を理解するよう努めること。可能な限り相手の在り方に染まってみること。これらの難しさと大切さ、そして面白さを学んだスタディーツアーだった。

生き方を学んだ１０日間

国際基督教大学3年　山﨑悠夏

大学２年生になったとき、ＢＤＰのマイクロファイナンスの資金を集めるためのクラウドファンディングキャンペーンに携わった。結果として、キャンペーンに貢献できたかと問われると疑問符が浮かぶような不毛なかかわり方にはなってしまったが、自分が経済学をマイナーで専攻していることもあり、バングラデシュのマイクロファイナンスがどうなっているのかはキャンペーン終了後もずっと頭の片隅で気になっていた。だからこそ、このスタディーツアーの話が持ち上がった時、ぜひバングラデシュに行ってみたいと素直に思った。

前述したように、当初はマイクロファイナンスについて学ぶことが参加の主な目的だった。しかし、実際にバングラデシュで日々を過ごしてみると、それ以上の学びがあった。特に印象的だったのは、バングラデシュ人の他人への接し方、そして人生の生き方だ。

バングラデシュで暮らす中で、バングラデシュ人は相手をじっと見つめることに気づいた。最初は、その視線が少し落ち着かなかった。例えば、車移動の時に通行人たちが肌の白い私たちをいぶかしげに見つめてきたときなどは、私たちは彼らにとってあくまでも異邦人なのだと思い知らされた。しかし、日が経つにつれて、彼らの素直なまなざしが心地よく感じるようになった。「本音と建て前」というように、日本人は相手に本心を隠す習性がある。仲が深まらない限り、会話をしても相手が自分にどのような感情を抱えているかを把握しきれないことがほとんどだ。だからこそ、ネガティブな感情もポジティブな感情も包み隠さないバングラデシュ人に惹かれたのだと思う。特に、感謝の気持ちを伝える際の彼らのまなざしには心動かされるものがあった。バングラデシュ人からのおもてなしを受けたとき、何度も彼らに「ありがとう」と感謝の気持ちを伝える場面があった。そのような言葉を言ったとき、日本人のように「どういたしまして」や「とんでもない」と返すのではなく、バングラデシュ人「ありがとう」と感謝の気持ちを目でありありと伝えながら言葉を返してくれた。目で気持ちを伝える彼らの姿を見て、自分も日本に帰った後、相手の目をまっすぐ見て心で会話しようと強く思わされた。

バングラデシュに来る前から、日本人から見てバングラデシュ人の目がキラキラと輝いて見えたり、人生を心から楽しんでいるように見えるという話は聞いていた。その話を聞いていた時は、無知で傲慢な考えだったと今は思うが、日本よりも貧困のレベルが高く、生きるために必要な衣食住の確保に必死にならざるをえない状況にあるバングラデシュ人は、幸せへのハードルが日本人と比べて低いのではないかと思っていた。しかし、バングラデシュ人と深く話をする中で、このような認識はすぐさま覆された。スタツア報告書のタイトルにもなっている”proti muhurta”という言葉を教えてくれたラハジさんは、私たちに、「大人になってしまうと、日々の忙しさに追われるようになってしまう。今を一番存分に楽しめるのは学生のときなのだから、一瞬一瞬を大切にしなさい」とおっしゃっていた。バングラデシュ人も日本人と同じように日常の大変さやつらさを感じていながらも、その中で感じる幸せにしっかりと向き合って大切にしているからこそ、キラキラと輝きのある人生を送っているように日本人の目に映るのだと実感した。

留学に行く直前、しかも就活真っ只中でバングラデシュに行くことは果たして正解なのか、バングラデシュに行く際も、行っている最中も何度も自分に問いた。しかし、帰国した今思うのは、そんな時期だからこそ行く意味があったということだ。「人との関わり方」や「人生」について改めて考えさせられたこのバングラデシュへのスタディーツアーは、２０代の自分にとって大きな財産となった。

省察し続けた11日間

国際基督教大学3年　朝倉凜花

バングラデシュに降り立ち、クラクションの音に驚いた日から、現地の人々と1週間と少し寝食を共にし、「アバルデカホベ」と抱き合ってお別れした日まで、毎日新しい発見をしては自分を省みた。この期間で聞いたこと・感じたことを書き留めたノートは、真っさらだったはずが帰る頃にはいつの間にか文字でびっしりと埋まっていた。

ACEFのスタディツアーでは毎日朝祷・晩祷、シェアリングをする時間がある。朝祷・晩祷では聖書の一部の箇所を読み、その内容に関連した経験や自身の学びを話し、シェアリングでは1日の経験を振り返って感想を共有する。日々新たな経験をし、その度に喜び、悩み、考え、などと様々な感情を巡らせていた私にとって、皆と共有し、思考を整理する時間がとても貴重だった。帰国した今ノートを振り返ると、現地の人々が私たちに向ける視線に戸惑っていた自分、子どもたちとの関係の築き方に悩んでいた自分、無意識に偏見を抱いていたことに嫌になっていた自分、など様々な「私」を発見した。その中でも主に印象に残っている二つの出来事を以下に記したいと思う。

一つ目はテゼとボクシガンジの学校にいたガロ族の子どもたち、そして女性クラブ・L'Archeの障がいを抱えた方々、いわゆる「マイノリティ」と言われる人々との出会いである。彼ら彼女らの私の第一印象は「何か底からみなぎる力がある」ということだった。なぜなら、ガロ族の子どもたちも女性クラブおよびL'Archeの方々も、とても素敵な笑顔で私たちを迎え入れてくれ、言葉の節々から自信を感じられたからだ。日本では少数民族や障がいを持った方々はどこか押しやられている印象があった。今まで自分が築いてきた価値観とは異なる「マイノリティ」の姿を目の当たりにし、困惑していた時、朝祷・晩祷にて主の祈りに一つの言葉を見つけた。それは「小さくされた者が一人も切り捨てられることなく、かえって人々の交わりの核となり、永遠の命を力強く生きる」というものだった。私は彼ら彼女らからまさにこの言葉通りのことを感じ取った。ガロ族の子どもたちも、障がいを抱えた方々も、もちろんそれぞれに苦しい時があり、耐え難い経験をしてきただろう。しかし、自らが必要とされる場所を見つけ、力強く生きる人々の姿、そして彼ら彼女らを受け入れるコミュニティの姿に私は感銘を受けた。

二つ目は自分は何者なのかという問いに考えを巡らせた経験である。この問いはシェアリングにおいても度々話題に登った。私たちは朝昼晩手でカレーを食べ、一緒に停電を経験し、凸凹道を車で揺られながら移動するというように同じ空間、時間を共有して、共にバングラデシュの人々と過ごしたが、その一方で蚊帳の中で眠り、煮沸された水を飲み、パーソナルな内容のインタビューを行う、というように自らが様々な権利を持っている状況に違和感を感じていた。また、教室で姿勢を正して行儀良くしている子どもや新たに設立した図書室で本を読んでいる姿を見せようと集まってくれた大勢の子どもたちを見ては、訪問に合わせた演出を少なからず感じてしまい、もっと自然な姿が見たいのにと思うこともあった。そんな気持ちを抱えていた際、シェアリングの時間に、ツアーに同行してくださった山内さんから「それも全部含めてホスピタリティなんだよ」というお言葉をいただいた。その時少しモヤが晴れ、私は立場関係や違いを変に意識してしまったのかもしれないと感じた。思い返せばバングラデシュの人々は皆、私たちに対し友達のように、家族のように接してくださった。違う国に行くということは、色んな意味で異なる価値観に出会う。今回のスタディツアーではその価値観を超えて関わるということができたのかもしれない。

スタディツアーを通して、私にとってバングラデシュという国がより色鮮やかになった。日本では、未だ「アジアの貧困国」と言われることが多く、親戚にバングラデシュに行くことを伝えるときもどのように説明をすれば良いのかわからなかった。しかし今は、「一人一人が力強く生きていて、温かくて、愛をそのままの形で表してくれて、自分の国に誇りを持った人が多い素敵な国」と伝えることができる気がしている。

あらゆる雑音から離れ、バングラデシュという国である意味で無防備な真っさらな状態で色々な場所に飛び込んでは、その都度たくさんのことを吸収し、自らを省みるという日々を送ったが、こんなにも尊く豊かな時間はないだろうと今振り返って思う。このような機会を可能にしてくださった全ての方に感謝するとともに、今後も時に省察しながら歩みを進めていきたい。

あなたの隣にバングラデシュを

特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金

〒169-0051　東京都新宿区西早稲田2-3-18-26
TEL:03-3208-1925
Email:acef@acef.or.jp
Website:https://acef.or.jp

＜本スタディツアーは、「2022年度積水ハウスマッチングプログラム」よりご支援をいただいています＞